



会報誌 14 号

近未来の家庭教育

家庭教育支援協会理事長
二川 早苗

漫画が悪者扱いされた時代があった。私が子どもの頃、我が家では、『小学一年生』の定期購読だけが許されていた。そのうち、月一回発売の『りぼん』も買ってもらえるようになり、友だちの持っている漫画と交換しながらこっそり読んでいた。親にはバレバレだっただろう。弊害はといえば、うすぼんやりとした記憶を辿っても、特になかったように思う。それどころか、竹宮恵子のファンタジーの世界や手塚治虫の世界に浸っていたらもっと世界が自由だっただろうと想像する。

私が子育てを始めた頃に、名指しで批判されたのが、『クレヨンしんちゃん』だった。お下品で教育上よくないというのが理由だった。我が家では、『クレヨンしんちゃん』も『アンパンマン』も『ドラえもん』も、毎週楽しみにしていたが、特に問題があったとは思えない。

あれほど、大人たちの目線から逆風を浴びた漫画やアニメといったサブカルチャーは、日本文化を世界に伝播し、メインストリームから派生した現代アートのトリガーとなっている。漫画やアニメは一部の大人たちからなぜ忌避されたのだろうか。私の母は、当時漫画を禁止していたことをすっかり忘れて「可哀そうに、そんなに漫画が読みたかったの？」と拍子抜けするこたえで返してくれた。

ゲーム、スマホ、SNS といった新しいツールやデバイスが出るたびに、親たちから懸念の声が上がるが、デジタルネイティブの子どもたちは、気にも留めない。

そして、いま、メタバース(仮想現実)が、忍び寄っている。悪いことばかりではない。現実世界に生きづらさを感じた時のシェルターの役割を果たしてくれる可能性もある。居心地の良いコミュニティーを探して自分の居場所を見つけることができるのだ。しかし、引きこもりを助長するのではないかといった危惧や、科学的な脳に対する影響の解明がなされていないところでは、家庭のルールづくりもままならず、仮想空間に身を委ねることはできない。

プラットフォームを変化させつつ現代社会に浸透してきた文化のトリセツ(取扱説明書)を家庭教育はどうルールづければよいのだろう。

一つ言えることは、どんなに丁寧なトリセツがあったところで、ことの是非を判断するのは大人だということだ。近未来の家庭教育も、われわれ大人が、人としてどうあるべきかが問われているのに変わりはない。



活動報告① 家庭教育支援協会令和2年度第1回研修会 2020年6月27日

一昨年6月27日(土)に行われた家庭教育支援協会令和2年度第1回研修会では『家庭教育』とは何か…定義について考える』と題して Skype にてグループディスカッション形式にて語り合う予定でしたが、家庭教育支援協会創立10周年の記念誌発行について、話し合いました。会員のみなさま全員に創立に寄せて、掲載文の執筆をお願いすることになりました。

活動報告② 日本家庭教育学会第35回大会 誌上開催(2020年8月22日～31日)

一昨年8月に行われた日本家庭教育学会にて家庭教育支援協会より個人発表された内容をご報告申し上げます。

不登校予備軍 ーある少女の苦闘ー

家庭教育師・家庭教育アドバイザー 石井 登



学校への『行き辛さ』を抱えた中学生 A さん(公立中学校女子)は、令和元年9月から令和2年3月までに手紙類18通、ホワイトボード33回、発言メモ7回に亘り、その苦闘を私に対して記した。

日本財団の「不登校傾向にある子どもの実態調査」及び文部科学省の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」を基に推計すると、45万人以上(7.2人に1人)の中学生が学校に馴染めずに苦しむ「不登校予備軍」と言える。これは彼女のような生徒が何十万人も存在していて、誰にも起こりえることを示している。その存在を十分に認識し、深刻な問題に発展する前に、大人の理論による対応でなく子どもに寄り添うことが大切である。予防的対処としては、家庭内での良好なコミュニケーションを前提として、①愚痴を聞いて欲しいシグナルを察して優しく聞いてあげる。②常に寄り添い共感信頼できる味方であることを示す。③トラブルの現象、とった対応、感情、願望等を書き留めておく。④勇気をもって『行けなくなる』前に『行かない』を決断する。ことが重要である。

活動報告③ 家庭教育支援協会令和3年度第1回研修会 2021年5月15日

昨年5月15日(土)に行われた令和3年度第1回研修会で田光氏の発表内容をご報告申し上げます。

コロナ禍のDV、児童虐待

家庭教育アドバイザー 田光 江美子



DV(ドメスティック・バイオレンス)は、日本では「(元)配偶者」「(元)内縁関係」などの密接な関係にある者からの暴力を言う。暴力の種類には、身体的暴力、精神的暴力、性的暴力の他、児童虐待と違うところとして経済的暴力がある。DVから逃れない要因として、経済的な不安や子どもには父親が必要という考え、アンビバレンスな想いや、自己肯定感の低下などがあげられる。コロナ禍だからと、DVが特に増えたとか減ったとかの実感も報告もないが、警察と児童相談所の連携が通知されてから夫婦喧嘩やDV目撃の警察からの通告が増えていることは間違いない。暴力の目撃は子ども本人が受ける身体的暴力よりも子どもの脳の萎縮率が高いという研究報告がある(友田明美、福井大学2013)。

どんな父親でもいればいいのか。親として子どもを守れているのか。そして自分を大切にできているか。渦中にあるのは気づけないものです。誰でもできる支援としてDVの相談を受けたら否定せず受け入れ、専門機関への相談を促してほしい。そして、危険性が高い場合は警察へ。他人からの暴力なら警察へ駆け込みますよね。

活動報告④ 家庭教育支援協会令和3年度第2回研修会 2022年 2月19日

今年 2月19日(土)に行われた令和3年度第2回研修会での発表内容をご報告申し上げます。

「児童虐待、マルトリートメント、家庭環境など、家庭に関する問題について」 参加者各自3分間発表

○適切なしつけを受けている子どもが社会的にも成功し、幸福度も高いというデータが出ており、就学前の教育、つまり家庭教育が重要である。私たちの行動の確かさに裏付けもあるので、これからの家庭教育について話していきましょう。

○私が目指してきた家庭教育は、親の価値観を押し付けるのではなく、自分の人生を自分で選択でき、自分をコントロール、マネジメントできるようにすることであると考えている。子どもをどのように自立させていけるのかという視点が大切である。

○OPTAで情報共有推進活動をしているが、情報共有自体の不足により、児童虐待やマルトリートメント等を認識困難と考えている。家庭教育支援協会でも、情報共有方法を工夫し、会報やコラムがより共有できるようになるとよいと考えております。

○加害者家族を支援する活動をされている方が出版している本の内容になりますが、父親による虐待で亡くなった子どもの事件について、この家庭では根の深いマルトリートメントがあったが、その両親の家庭にも根の深いマルトリートメントが見えた。一番中心に勉強しているのが、その虐待というか、マルトリートメントについてなので、その観点からご紹介させていただきました。

○新型コロナが始まり、社会事情や家庭生活の在り方が大きく変化し、児童虐待やDV、他人を巻き込む自殺願望等がテレビやニュースでも本当に多くなりだしてきている。共働きが当然になり、社会に女性が進出し、男女平等の中で家庭崩壊、家庭教育が崩れてきていると強く思っている。子どもは親と同じ行動を繰り返すので、家庭教育を置き去りにせず家庭の伝統文化も大切に、もう一回、原点に戻って家庭教育の大事さを考えて欲しい。

○家庭は、老後になってもずっと続くもの。長寿に興味があって、あと、親と永く暮らせる家庭教育を目指している。親孝行が大切。親と一緒に暮らすのが本当に幸せと考えており、家庭教育アドバイザー以外の介護関連の資格を取り、活動できていることにとっても感謝しております。

○内閣府の子どもの貧困対策に関する有識者会議構成員の方が子ども基本法といった共通認識をもてる法律が必要というご意見を伺い、とても関心を抱きました。子どもたちをとにかく守るという視点にたった、虐待問題に対応できる法律が緊急必要不可欠であると思った。

○ヤングケアラーやネグレクト家庭の問題も多く、親の知的/精神障害に受ける影響が大きいと認識している。家庭の事情もあるので一概にいけないが、子どもが将来に社会で生きる力を培う機会を得られない状況が生じていたら、看過してよいことではないと考えている。見えるものを無視しない。意識したいものである。

○コロナで保育園や幼稚園の休園が相次いでしまっていて、働く若いお母様方の負担を軽減したいと考えている。両親とは異なる大人と斜めのつながりがあるのもよいと考えており、お隣さんも知らず、ご挨拶程度のお付き合いが多いと思うが、出入りできるおうちがあるのも、よいと思っている。

○未成年の死因第1位は自殺であるということに違和感をもっている。子どもよりも若者との関わりがあり、人生100年時代をどうやって生きていくのかというところに焦点を当てている中で未成年のヤングケアラーの問題にも関わりがあり、少子高齢化の中で子どもたちにどう教えていったらよいか学びたい。

○仕事が忙しかったり、自分が育った環境の影響から夫婦間や地域と疎遠になったりと、話し相手がなくて子どもをどう育ててよいか分からない方が多いと感じている。夫婦の繋がり、地域との繋がり、もっと人と人の繋がりを増やしていくのがよいのではないかな。

活動報告⑤ 家庭教育師・家庭教育アドバイザー交流会 2022年2月26日

今年2月26日(土)に日本家庭教育学会主催『家庭教育師・家庭教育アドバイザー交流会』が開催されました。1月16日の長岡京市商工会文化交通業部会主催リレーセミナーで講演された石井氏に報告していただきました。

子どもの「やる気」を育む家庭教育 ～家庭教育の役割と親の自覚～

家庭教育師・家庭教育アドバイザー 石井 登



だれもが、自分の人生を自分で選択できるようにならない。
そのためには、学問とマネージメントの経験が必須である。

「子どもの生活と学びに関する親子調査2015」、(財)国立青少年教育振興機構調査2014年」等を引用し、変わる学校教育、家庭環境、学校の学びの変化、「主体的な学習能力」の獲得と発達期との関連性、何が子どもの能力を伸ばすのか、“やる気”を高める親の姿勢、学習能力を培う基礎力、実践例、思春期の子どもの学習を阻害する4つの主要要素、自律スキル(自制心や克己心)を高める、等についてお話しさせていただきました。

私たちのすべき大切なことは、「伝えること」と「寄り添うこと」。親の価値観優先ではなく、子どもの意思や考えを尊重することが大切。将来役に立つだろうということを短期間に一気に効率的にやらせようとする事で子どもの自主性が育まれることが阻害されてしまう。親御さんに状況をご理解していただき、対応していただけるような活動をこれからも頑張っってやっていきたいと考えています。

家庭教育支援協会 10周年記念誌を発行しました！ 2021年4月

家庭教育支援協会は、令和2年12月18日をもって創立10周年を迎えることができました。10年間、みなさまより陰となり日向となり応援していただいた賜物です。寄稿もありがとうございました。



私たちの理念

ご挨拶

祝辞

10周年によせて

家庭教育支援協会概要

資料

10年のあゆみ

家庭教育支援協会広報活動

思い出のアルバム

編集後記

<編集後記>

『家庭教育は、すべての教育の出発点』と言われておりますが、皆様は「教育」そのものをどのようにお考えでしたでしょうか。私は、『親が(自身同士も含めて)子や孫を幸せにするために(可能な限り)働きかけること』と考えております。そして、その家庭同士が徐々にどんどん集まり繋がり、親族や地域、そして社会や国が形成され、社会教育が充実していく中で学校・家庭・地域や産・学・官等の連携協力等により、学校教育も一層よりよく充実していく、と考えておりますが、皆様はいかがでしたでしょうか。(尾形有三)